19世紀フランスの建築とガルッツォ修道院：カルトジオ会修道院の建築の幾何学と沈黙、理念の表出

Certosa di Galluzzo and the French Architecture in the 19th Century: Geometry, Silence and Expression of the Idea on Architecture of Carthusian monastery

白鳥　洋子
SHIRATORI Yoko

キーワード：アンリ・ラブルースト、ガルッツォ修道院、カルトジオ会修道院、幾何学、細い独立柱
Keywords：Henri Labrouste, Charterhouse of Galluzzo, Carthusian monastery, geometry, slender independent columns

In Henri Labrouste's drawings during his stay in Italy, those about the monastery are also left. Regarding the Carthusian architecture represented by Monastery of Galluzzo near Florence, he found its value in the 19th century, after that Le Corbusier also found it in the 20th century. In this article, I perceive the overview and details of this monastery, at the same time I discuss the value of this monastery on the architecture in the 19th century.

１．はじめに

ピエール＝フランソワ＝アンリ・ラブルースト（Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875）は代表作品サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館（Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850）、パリ国立図書館（Bibliothèque nationale, 1854-1875）で知られる。両図書館は、記念碑的な公共建築に鉄構造が露出の状態で使用された早期の事例としてその意義が認められている。近代建築史においては、彼と彼の作品に鉄構造の新たな展開への貢献、技術的先駆性に価値を認める見解が一般的であり、西洋建築の芸術意匠の系譜においては、19世紀フランスの狭義の古典主義に対して、幅広い表現を許容するロマン主義を確立し、同時に建築の合理的な潮流を新たに築いた人物とされる[1]。

先の論文「アンリ・ラブルーストのイタリア時代のデッサン：アッシジのサン・フランチェスコ聖堂の描写に見られる細い柱と石造天井」では同聖堂を例に取り、彼のデッサンと実物との照合により、彼の細い独立柱への探究はイタリア留学時代、1825年に始まっていたこと、同聖堂の構造は後の代表作品に見られる「箱入れ構造」、水平力の分離、屋根と天井の別構造などにおいて、近しい考え方であることを明らかにした。

ラブルーストはイタリア留学時代に膨大なデッサンを残しており、その中には修道院のものも含まれている。フェレンツェの近郊にあるガルッツォ修道院（Certosa di Galluzzo, 1341-1365, 15､16世紀）[2]は20世紀初頭にル・コルビュジェ（Le Corbusier, 1887-1965）が訪問し、その価値を認めたことでも知られる。本稿ではガルッツォ修道院の詳細を捉えながら、ラブルーストのデッサンを中心に実物との照合を行い、彼の着眼点を明らかにすると同時に、19世紀フランスの建築における同修道院の価値について論じることを目的とする。

２．シャルトルーズ

２－１．エマのシャルトルーズ

19、20世紀のフランスの資料ではしばしば「フィレンツェ近くの修道院（Chartreuse près Florence）」、「エマの修道院（Chartreuse d'Ema）」と記される修道院がある。ラブルーストのデッサンでは「フィレンツェ近くの修道院」と記され、コリネ＝ゲラン（Collinet-Guerin）[3]の写真（図１）では「エマの修道院」と記されている。ル・コルビュジェも「エマの修道院」と記している。この修道院はガルッツォ修道院のことであり、前呼称はフィレンツェ近くにあることに由来し、同修道院はフィレンツェから４㎞程離れたガルッツォ村の近くの自然に囲まれた丘の上に建っている。後呼称は地理に由来し、同修道院のある丘の麓でエマ（Ema）川とグレーヴェ（Greve）川が合流し、この地域はエマの谷（Val d'Ema）とも呼ばれている。シャルトルーズ（Chartreuse）はカルトジオ会の修道院を示す。

コリネ＝ゲランの1910年頃の写真には、回廊の光と影のコントラスト、柱とアーチの繊細さと軽やかさ、抑制の効いた幾何学的な意匠が映し出され､近代建築を予感させ、印象に残る作品であった。写真の回廊は同修道院の「兄弟修道士の小回廊（Chiostrino dei Fratelli Conversi, 1475-1485）」であり、初期イタリア・ルネサンス建築の特徴を持っている。コリネ＝ゲランはガルッツォ修道院の他にもパエストゥムの神殿（Templi di Paestum, 紀元前６､５世紀）､リミニ（Rimini）のマラテスティアーノ寺院（Tempio Malatestiano, 1450-）など、ラブルーストが研究、調査を行った建築の写真を残しており、それらは大変美しく、ラ

図１：コリネ＝ゲラン、「エマの修道院」、1910年頃。©INHA

ブルーストと不可思議な縁のある写真家である。

２－２．グランド・シャルトルーズ

カルトジオ会修道院の総本山はグランド・シャルトルーズ（Grande Chartreuse, 1676 年以降）であり、フランス、イゼール（Isère）県、グルノーブル（Grenoble）近くのサン＝ピエール＝ド＝シャルトルーズ（Saint-Pierre-de-Chartreuse）にある。フランス・アルプスのシャルトルーズ山脈の山間に 1084 年に聖ケルンのブルーノ（Bruno von Köln, ca.1030–1101）が弟子達とともに人里離れたこの地に隠遁し、カルトジオ会を創設した[4]。グランド・シャルトルーズは俗世界とは切り離され、僅かな機会を除き会話をせず、厳しい規律の下に沈黙の中で修道士達は祈りと瞑想の日々を過ごした。

現在の建物は 17 世紀に建造されたものであり（図２）、内部の様子や修道士達の暮らしは映画『大いなる沈黙へ』[5]に収録されている。建物は簡素な様相であり、映像に映し出された自然の光と影が美しく、静寂と聖歌の朗唱には神々しさがあり、修道士達の穏やかな所作とともに芸術的な世界を築き上げている。同修道院には大小の中庭があり、大回廊の中庭には修道士達の庭付きの個室が配置され、この構成はカルトジオ会修道院の典型の平面形式となっている。アルプスの雪深く冬の寒さが厳しいグランド・シャルトルーズと温暖なトスカーナ地方のガルッツォ修道院とでは平面の形式は共通するが、全体の様相は異なっている。

図２：「グランド・シャルトルーズ」、ロール（Rol）社、1913 年。

３．ガルッツォ修道院

３－１．建造の経緯

ガルッツォ修道院は前述の丘に建ち、外周は壁で囲まれ、城塞のような外観をしている（図３）。14 世紀半ばに政治家、銀行家のニッコロ・アッチャイウォーリ（Niccolò Acciaioli, 1310–1365）により建造された。アッチャイウォーリ家は中世から続くフェレンツェの名門貴族であり、ニッコロ・アッチャイウォーリはナポリ王国アンジュー家支配の時代にナポリで過ごした。ナポリ宮廷ではグランド・セネシャル（Grand Sénéchal）[6]の称号を授与されている。彼は芸術、文芸の愛好家であり、ペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304–1374）、ボッカチオ（Giovanni Boccaccio, 1313–1375）など、当時の芸術家達の庇護者であった。ボッカチオは同修道院の建造に関して「建築で永続的な名声を求めることはニッコロ様の究極の目標の一つであった」との言葉を残している[7]。

ガルッツォ修道院は 1341 年頃に建設が開始され、アッチャイウォーリが亡くなる 1365 年にはほぼ完成した。15 世紀には「兄弟修道士の小回廊」、「大回廊（Chiostro Grande, 1491–1520）」、16 世紀には「修道士の小回廊（Chiostrino dei Monaci, 1557–1559）」、サン・ロレンツォ教会（Chiesa di San Lorenzo, 1550–1558）のファサードと室内の装飾芸術など、各時代に改築が行われた[8]。サン・ロレンツォ教会は二つに分かれており、一つは修道士の教会であり、もう一つは兄弟修道士の教会である。修道院の大部分は 14 世紀半ばの建造であり、ロマネスク建築の重量感のある様相を残し、15 世紀に加えられた回廊が軽やかさを添えている。フランスのグランド・シャルトルーズの建造が 17 世紀であることから、ガルッツォ修道院はカルトジオ会修道院の最も古い時代の様相を今に伝える建築である。

図３：ガルッツォ修道院、外観、2019 年撮影。

３－２．平面の構成と修道院の規律

ガルッツォ修道院の平面構成の大きな特徴として、幾何学的であることと、各建物の配置が「沈黙」を旨とするカルトジオ会の精神と修道士が「単独」で行動することが反映されていることが挙げられる。同修道院は、崖となる東側の外周壁とアプローチの登り坂以外は全て直角の幾何学で構成されている（図４）。大回廊と教会前名誉の中庭（Corte d'onore di fronte alla Chiesa）は大きく、二つの小回廊と教会、礼拝堂、修道士の個室（celle）などは小さく、大小のスケール感が対比的であり、それらが幾何学的なパズルのように組み合わされている。全体を通じてボリュームとヴォイドの構成がそのまま意匠となっており、簡潔な様相であった。

大小の空間の組み合わせは魅力的なシークエンスを生み出しており、アプローチの坂を登り、小さな中庭で受付を済ませ、直線の緩やかな階段を登ると、広く開放的な教会前名誉の中庭に出る。教会前名誉の中庭から教会、礼拝堂を経て、兄弟修道士の小回廊、修道士の小回廊と似たような空間が続き、ここでは方向感覚を失うような迷宮性があった。それらの小空間を抜けると、最後に大回廊に辿り着くという構成であった。繊細な柱とアーチが連続し、眩しい芝生で彩られた大回廊が眼前に広がった瞬間は大変印象的であった（図５）。

同修道院では 18 人の「回廊の修道士（モナシ・デル・キオストロ、monaci del chiostro）」、５人の「兄弟修道士（フラテッリ・コンヴェルシ、fratelli conversi）」、修道院長（priorale）が居住することができた。収容人数が 24 名程度であったことは、他の修道院と比較すると、大変余裕のあ

る環境であったと言える。「回廊の修道士」は祈りと瞑想に専念する修道士であり、「兄弟修道士」は修道院に必要な大工仕事や農業などの労働や雑務を担い、助修士に当たる。修道士の役割の異なりは諸室の配置と密接に関係している。沈黙と静寂を遵守する回廊の修道士が居住する大回廊は入り口から最も奥の場所に配置され、役割上音を出す兄弟修道士の場所は手前に配置されている。聖職者ではないアッチャイウォーリの大きな宮殿は入り口近く、最も手前に配置されている。

修道士個室が並ぶ大回廊は最深部に配置され、俗人が入ることのない聖域であり、神秘の場所であると言える。同修道院の大きな特徴の一つは修道士の居室が個室であることにあり、他の会派では大部屋や相部屋であることが多い。これは、僅かな機会以外は会話をすることはなく、修道士達が周囲の雑音に惑わされることがなく、個室で日々祈りと瞑想に奉じ、沈黙を保つ同修道院の特殊性に起因する。

４．ガルッツォ修道院、デッサンの詳細

４－１．全体平面図

ラブルーストはイタリア留学１年目の1825年にガルッツォ修道院を訪れており、24歳であった。「全体平面図、復元」、「個室（修道士の）平面図」、「小回廊の立面の石積みの詳細」のデッサンを残している。１枚目の「全体平面図」（図６）は復元研究であり、実際の平面とは異なり、理想化したものである。ここにラブルーストの思考を読み取ることができる。実物と異なっている点は「全体の幾何学性が高められている」、「左右対称となっている」、「修道士個室が同じ住戸タイプに統一されている」、「小回廊の大きさが揃えられ、東西に並列している」、「教会は中央軸上に配置されている」、「他の箇所にも中庭が設けられ、大きさが揃えられている」ことなどが挙げられる。幾何学性が高められたことにより鋭敏な様相となり、中庭が増えたことにより修道士個室以外の箇所も居住性が高められている。これらのことは室内と屋外を色分けすると良く理解できた（図７）。幾何学を旨とするラブルーストの傾向はローマ大賞時代（図８）から見ることができ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、パリ国立図書館においても同様であり、この復元研究にもそれを見ることができた。この復元研究と最も共通性が高いものはレンヌ大神学校（Grand séminaire de Rennes, 1854-1856）である。

類似する平面図をウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク（Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879）も残している（図９）。これは「クレルモンのシャルトルーズ（Chartreuse de Clermont）」であり、代表著

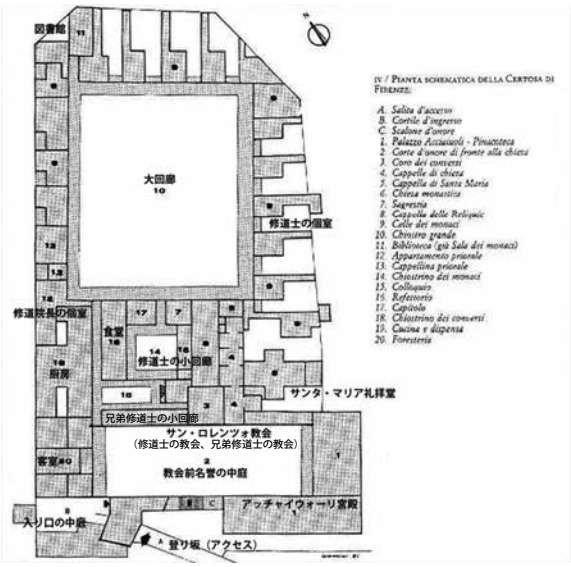

図４：ガルッツォ修道院、全体平面図（部屋名は筆者加筆）。

図５：ガルッツォ修道院、大回廊

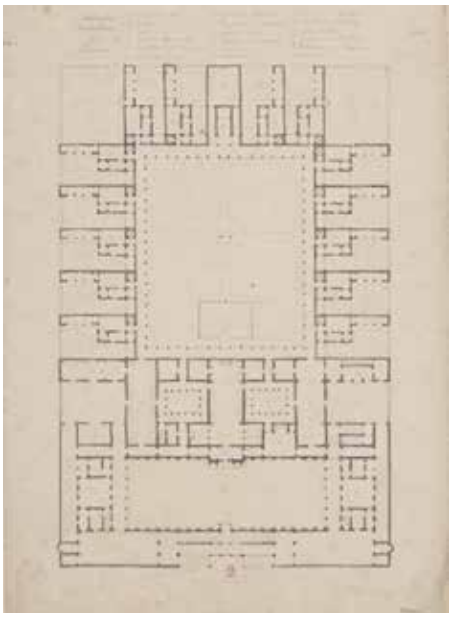

図６：アンリ・ラブルースト、ガルッツォ修道院、全体平面図、復元、1825。

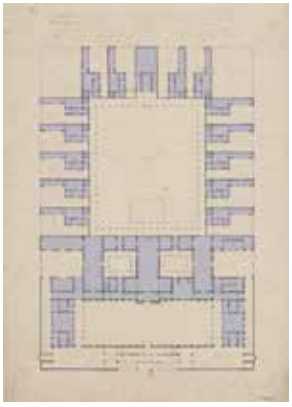

図７：アンリ・ラブルースト、ガルッツォ修道院、全体平面図、復元、1825。室内と屋外の関係（筆者加筆）。

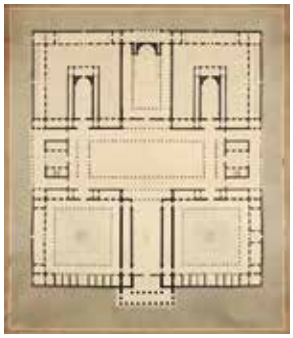

図８：アンリ・ラブルースト、「破毀院（Cour de cassation）」、ローマ大賞受賞作品、1824。

作の「フランス中世建築事典（Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle）」第１巻に掲載されている[9]。これも復元研究であり、同修道院は18世紀フランス革命の際に修道士の追放、不動産、資産の没収が行われ、19世紀半ばでは荒廃していた。現在は廃墟となった遺構が保存されている。同修道院はポール＝サント＝マリー修道院（chartreuse de Port-Sainte-Marie）が正式名称であり、オーベルニュ（Auvergne）地方、シウル（Sioule）の谷に位置している。創設は1219年であり、この地域では有力なカルトジオ会の修道院であった。

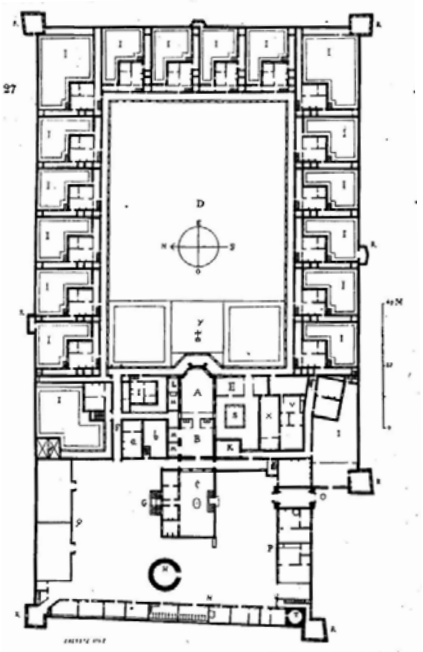

図９：ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク、クレルモンの修道院、「フランス中世建築事典」、1854–1868。

４－２．修道士の個室

２枚目の「個室（修道士の）平面図」（図10）からは平面計画が鍵型であること、室内と中庭が鍵型に組み合わさることにより各室が外気に接していることを理解することができる。実際に訪れたところ、個室の中庭も十分な広さを持ち、通風、採光に恵まれていた。幅は概ね12m程度、奥行きは部屋により異なり、10mから20m程度であり、中庭を含むユニットの面積は120㎡から240㎡程度である[10]。８月に訪問した際には爽やかな風が吹き、涼しく過ごしやすい室内環境であった。眺望も良く、個室からエマ谷の美しい風景を臨むことができた。

室内（図12）は質素であり、必要な家具が控え目に置かれ、窓からの光と影が美しく、沈黙を旨とする修道士に相応しい寡黙な空間であった。中庭は室内と概ね同様の面積であり、中庭が充実していることは修道士の暮らしと関係している。修道士はほとんど会話をせずに一日の大半をここで一人で過ごす。食事も大回廊側の小さな窓（図13）から運び込まれ、一人で取る。一日に数回、庭仕事の時間が設けられており、中庭は修道士の気持ちを爽やかにしたことであろう。

個室はメゾネット形式であり、主階、下階の２層であり、屋根裏を含めると３層となっている。大回廊からアクセスする主階では修道士は祈り、瞑想、研究、読書などの聖務を行い、食事や掃除、手仕事などの日常生活も営む。中庭へは屋外の小階段を降りてアクセスし（図15）、中庭は完全なプライベートな空間であり、静かな落ち着きと開放感があった。下階には中庭からアクセスする作業場兼倉庫があり、庭仕事や大工仕事ができるようになっていた。2019年８月の時点では植木鉢、肥料、掃除道具などが残され、往時の様子を想起させた。この個室の特徴を示すには断面図が欲しくなるのであるが、これについては詳細を後述する。筆者が見学した中庭では階段近くに井戸と雨水槽、中心に井戸または池の跡が残されていた。個室に井戸があることは画期的なことであり、共用の井戸から水を運ばなくて済む。個室に上水が装備されている状態であり、大回廊に出る頻度が減る。個室は設備が恵まれていることも特徴的であり、暖炉が設けられていた。

この修道士個室については、19世紀ではラブルーストの親しい友人、後にパリのフランス国立工芸院（Conservatoire national des arts et métiers, 1845–）、マルセイユのサント＝マリー＝マジュール大聖堂（Cathédrale Sainte-Marie-Majeure, 1852–1893）の設計を担う建築家レオン・ヴォードワイエ（Léon Vaudoyer, 1803–1872）も1827年に平面図を描いている（図11）。ヴォードワイエはラブルーストと全く同様に平面図を描いており、19世紀の建築家達の研鑽を伺うことができた。ガルッツォ修道院は1810年に廃止制圧を受けており、彼らが調査を行なった1820年代においては先駆的な研究であったと言える。筆者の調べた範囲ではラブルーストの図面はフランスで最も早い時期に描かれた同修道院に関する図面であった。彼は同修道院の新鮮さや価値を見出し、フランスの建築界へ伝えたと考えられ、ここにも発見があり、同時に改めてラブルーストの慧眼と先駆性を認識した。

図10：アンリ・ラブルースト、修道士個室、平面図、1825。

図11：レオン・ヴォードワイエ、修道士個室、平面図、1827。

図 12：修道士の個室、ガルッツォ修道院。

図 13：食事を運び入れる小さな開口、修道士の個室。

図14：収納の扉を兼ねた一本足のテーブル、修道士個室。

図15：中庭に降りる階段、修道士個室。

図 16：修道士個室の中庭。

４－３．ル・コルビュジェのスケッチ

ガルッツォ修道院は20世紀初頭にル・コルビュジェが訪問し、個室の仕組みはイムーブル・ヴィラ（immeubles villa, 1922）をはじめとする一連の集合住宅、全体の構成はラ・トゥーレットの修道院（Couvent de la Tourette, 1956-1960）の着想の契機となったことが知られている。イムーブル・ヴィラは直訳すると、「邸宅アパルトマン」、「戸建て集合住宅」であり、集合住宅でありながら戸建てと同様に庭を持つことが提案されている[11]。ラ・トゥーレットの修道院（Couvent de la Tourette, 1956-1960）では大回廊のある幾何学的な平面計画、静寂を保つ動線計画など、同修道院がル・トロネ修道院（Abbaye du Thoronet, 1160-ca.1200）とともに参照されたと考えられている[12]。

ル・コルビュジェは同修道院の以下のスケッチを残している。１枚目（図 17）は 1907 年に描かれたものであり、ラ・ショー・ド・フォン（La Chaux-de-Fonds）美術学校在学時代、20 歳で同修道院を訪れていた。このスケッチでは断面図が描かれていることが意義深く、メゾネット形式の個室の特徴が示されている。平面図の廊下状の箇所には「loggia（ロッジア）」と記され、立面図もそのように描かれ、ここがイタリア特有の外気に開かれた屋根のある空間、ロッジアであったことを示している。見学した個室ではロッジアはなく、壁があり、廊下となっていた。この廊下を通ると奥の小さな部屋に辿り着く。

さらに、この平面図では中庭の丸く囲まれた箇所に「a」と「ｂ」、その余白にはそれぞれ「受水槽（bassin）」と「井戸（puits）」と記されている。また、断面図にも井戸らしきものが描かれている。水の仕組みを記したことにはル・コルビュジェらしい観察力が感じられた。ル・コルビュジェの設計では個室は水道や衛生器具が充実していることが多い。「収納の扉を兼ねた一本足のテーブル」（図 14）は様々な作品で引用されている[13]。「エマの修道院」と記された右のスケッチ（図 18）は「東方への旅」の際に再度同修道院を訪れた時に描かれたものであり[14]、ロッジアと奥の小部屋に当たる箇所には「vue（眺望）」と記されており、実際にここは眺望が良く、彼の素描は実に多くのことを伝えている。

図 17：ル・コルビュジェ、「エマの修道院」、修道士個室、1907 年。

図18：ル・コルビュジェ、「エマの修道院」、修道士個室、1910 または 1911 年。

４－４．小回廊の立面の石積み

ラブルーストの３枚目の「小回廊の立面の石積みの詳細」は「兄弟修道士の小回廊（図 19）」か「修道士の小回廊（図 20）」のどちらかであり、両者とも繊細な柱とアーチが連続し、初期イタリア・ルネサンスの建築の特徴を持つ。石積みが分かるように描いたことはラブルーストらしい。「兄弟修道士の回廊」は２層であり、２階のイオニア式の柱は大変細く、天井は連続クーポールとなっており、クーポールとタイバーの機構が繊細であった。連続クーポールの天井ではアーチの形を見ることができ、建造の原理を理解することができた。１階、２階共に壁から突き出たせり石（impost）があり、その上部にアーチ端部が載っている。せり石には彫刻が施され、意匠的にも目に留まりやすく、ここでもアーチを支える建造の原理を理解することができた。連続クーポールと細い独立柱の組み合わせはパリ国立図書館と共通し、片方のアーチ端部が壁面のせり石が支える仕組みはサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館と共通している。

「修道士の小回廊」の概要は兄弟修道士の小回廊と概ね同様であり、上部に部屋が載り、イオニア式の柱がそれを支えている。この柱の基部には四角柱のペデスタル（台座、pedestal）設けられていることに特徴があり、ペデスタルは階高と柱の長さとオーダーの比例を調節しており、腰壁ではないので中庭と回廊との空間的連続性が高められてい

た。ペデスタルにより階高とオーダーの比例を調節する方法はサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の鋳鉄の柱の基部と共通する。修道士の小回廊の配置場所には意図があり、ここは大回廊、修道士達が集まって朗読を行う「章の部屋(Sala del Capitolo)」、食堂と繋がっている。修道士達が行き交う中心的な場所であると同時に、彼らが顔を合わせる場所である。それが修道院全体の中心となる場所に配置されている。一方、最も印象に残る大回廊のデッサンが見付からなかったことは意外であった。

図 19：「兄弟修道士の小回廊」、ガルッツォ修道院。

図 20：「修道士の小回廊」、ガルッツォ修道院。

５．ラブルーストのデッサン、その他の修道院

５－１．サン・マルティーノ修道院

ラブルーストは他の修道院のデッサンも残しており、一つはナポリのサン・マルティーノ修道院（Certosa di San Martino, Chartreuse de Saint-Martin, 1325-1368, 16 世紀、17 世紀）[15]、現国立サン・マルティーノ博物館であり、1826 年に訪れている。同修道院もカルトジオ会派であり、ナポリのヴォメーロ（Vomero）の丘に建つ。建造はガルッツォ修道院と同様に 14 世紀、ナポリ王国アンジュー朝の時代であり、ガルッツォ修道院よりやや先に建造された。16 世紀、17 世紀にかけて多くの改装がなされ、バロック期の豪奢な室内芸術が著名である。

ラブルーストは「修道院全体の平面図」、「修道士の個室の平面図」、「立面図（部分詳細）」を描き、一葉の紙に纏めている（図 21）。彼は教会や礼拝堂のバロック期の豪奢な室内芸術には触れず、全体平面図と修道士の個室を描いており、彼がこれらに着目していた様子を改めて確認することができた。平面の構成はガルッツォ修道院と同様にカルトジオ会の特徴を持ち、全体は幾何学で構成され、建物の配置も概ね同様であり、手前に教会前名誉の中庭、教会、奥に大回廊の中庭と修道士の個室が配置されている。大回廊に面さない翼を持ち、修道士個室があることと、小回廊の位置などに違いがある。翼の修道士個室の平面はガルッツォ修道院と同様である。この葉に彼が立面図を残したことは意義があり、ル・コルジュジェのスケッチと同様に個室の特徴を示している。このラブルーストのサン・マルティーノ修道院の図面もおそらく最も早い時期にフランス人建築家により描かれた図面であると判断される。

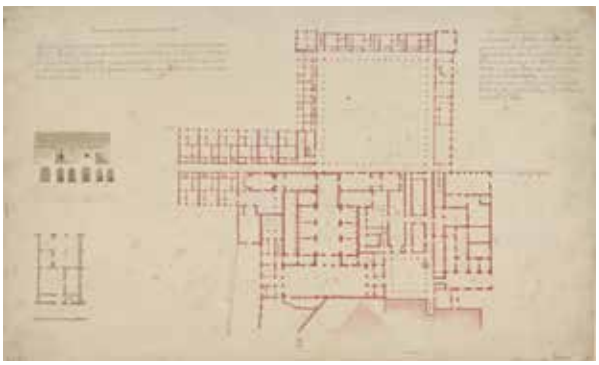

図21：アンリ・ラブルースト、サン・マルティーノ修道院、全体平面図、修道士個室平面図、同立面図、1826 年。

５－２．モンテ・カッシーノ修道院

ラブルーストは 1826 年にモンテ・カッシーノ修道院（Abbazia di Montecassino, Abbaye du Mont-Cassin, 6 世紀、8 世紀、17 世紀、20 世紀）[16] にも訪れ、「全体平面図」（図 22）、「中庭の透視図」、「透視図（全体の外観）」のデッサンを残している。モンテ・カッシーノ修道院はベネディクト会の総本山であり、イタリア中部、ラツィオ（Lazio）州、フロジノーネ（Frosinone）県、カッシーノ近くにある丘の上に建っている。聖ベネディクスが 529 年に同地に修道院を創設した。ベネディクト修道会の理念は「清貧・貞潔・従順」であり、修道値達は祈りと労働の双方に従事した。両会派の違いは労働であり、ベネディクト修道会は広大な領土や財産を所有した時代もあった。一方、同会派は古代の遺産を保管し、中世においては学問と文化の保存・普及に貢献したことが知られる。同修道院は破壊と復興の繰り返しの歴史を持ち、6 世紀末に破壊され、8 世紀に再建され、9 世紀にイスラム教徒による破壊、その後に再建され、11 世紀に再建が進み発展した。14 世紀に地震により瓦解した。17 世紀にはナポリ・バロックの意匠の外観、室内芸術が施された。第二次世界大戦の際にはドイツ軍の利用を危惧した連合軍により完全に破壊された。

平面全体の構成は幾何学性が高く、これは前述の二つの修道院と共通する。一方、入り口近くの回廊、教会前名誉の中庭が広いこと、教会が大きく、中心の奥の方に配置されていることなどが異なっている。最も大きな相違は修道士の大回廊の位置であり、同修道院では修道士の大回廊の位置は最深部ではなく、入り口近くの人の目に触れやすい場所であり、世俗と明確に隔離されていない。これは会派の理念と関わっており、ベネディクト会では「静寂」を旨としていない。平面の配置と構成は会派の理念が表されており、ガルッツォ修道院では深部の修道士の祈りと静寂の場に重きが置かれていると言え、モンテ・カッシーノ修道

院では教会と教会前中庭、入り口付近の中庭に重きが置かれていると言える。

修道士個室においてはモンテ・カッシーノ修道院ではメゾネット形式でもなく、個人の庭もない。３、４階建てと階が重ねられ、多くの修道士を収容することが可能であり、高密度となっている。中庭の透視図では、ラブルーストは入り口付近のローマ風の連続アーチの廊と奥が透ける様子を描いている。全体の外観の透視図では、丘の上に立ち周辺の様子を含んだ構図により要塞のような様相、ボリュームの構成と小さな窓が連続する簡潔なファサードを描いている。

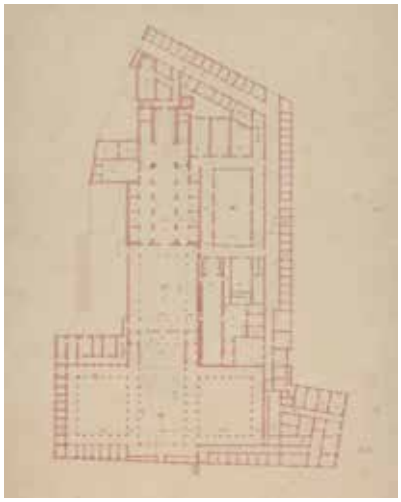

図22：アンリ・ラブルースト、モンテ・カッシーノ修道院、全体平面図、1826 年。

６．まとめ

ガルッツォ修道院の詳細の把握から、その魅力は幾何学性、俗から聖の静寂に向かう平面の構成、大小の空間の対比、細い柱の回廊、シークエンス、配慮の行き届いた修道士個室にあることを理解することができた。また、同修道院はラブルースト、ル・コルビュジェと優れた建築家達を惹きつけ、そして、彼らは同修道院の優れた箇所を発見して描き、後世に伝えていた。ラブルーストが最も早い時期に同修道院の図面を描いたフランス人建築家であったであろうことは改めて彼の秀でた力を示している。

中庭を持つ幾何学性の高い平面の構成は後の二つの図書館、レンヌ大神学校にも現れ、後者は共通性が高く、これについては別の機会に詳細を述べたい。同修道院の幾何学による簡潔な様相、意図と連動する平面の構成と諸室の配置は近代建築に通じるものがあった。ル・コルビュジェのスケッチの「ロッジア」と「井戸」の記載は驚きを持って知り、個室の良識的な採光、通風、設備の充実は近代的であった。それらが 14 世紀の修道院にあったことは新鮮な発見であり、それをル・コルビュジェのスケッチは教えてくれていた。

サン・マルティーノ修道院との比較参照からは、ガルッツォ修道院では大規模な改修や増築があまり行われず、14 世紀、最も古い時代のカルトジオ会修道院の姿を伝えていることを理解することができ、その観点からも同修道院の価値を見出すことができた。モンテ・カッシーノ修道院との比較参照からは会派の理念の相違が平面の構成、諸室の配置に直接的に関係していることを理解できた。

ガルッツォ修道院の大回廊は一般の修道院とは異なり、教会や総会室、写字室、食堂、暖房付き休憩室（chauffoir）などが接続しておらず、修道士たちの聖務のためだけにあると言って良い。これは同会派ではそれほどまでに沈黙と個人による祈りと瞑想に重きを置いていることの表れであると言える。同修道院では諸室の配置、構成が静寂を保つことと連動しており、ここには自然な論理があった。最深部に位置する大回廊では会派の理念である沈黙が象徴され、数世紀にも亘り隠され続けたことには神秘性があった。ラブルーストのガルッツォ修道院のデッサンと実物との照合と本稿で述べてきた諸点を纏めるのであれば、同修道院の魅力は全体の構成の幾何学性、諸室の配置、大回廊の大空間から個室における細やかな配慮に至るまで、一貫して「沈黙」と関わりがあり、それは理念の表出であり、それらの価値は 19 世紀前半にラブルーストにより発見され、20 世紀のル・コルビュジェへと受け継がれたと結論付けられるのである。

謝辞

本研究は JSPS 科学研究費補助金（科研費）の助成を受けたものである。基盤研究（C）、17K06749、「パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流」。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Reseach（C）. 2019 年８月の現地調査ではイタリアの様々な教会、修道院から大変親切にしていただきました。心から感謝を申し上げます。

参考文献

ラブルースト関連：Saddy, Pierre., *Henri Labrouste. Architecte, 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites, Paris, 1977. Drexler, Arthur（ed.）, *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts,* The Museum of Modern Art, New York, M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts, 1977. Middleton, Robin（ed.）, *The Beaux-Arts and nineteenth-century French architecture,* Thames and Hudson, London, 1982. Zanten, David Van, *Designing Paris : Architecture of Duban, Labrouste, Duc and Vaudoyer,* MIT Press, Cambridge, Massachusetts London, 1987. Leniaud, Jean-Michel（dir.）, *Des palais pour les livres, Labrouste, Sainte-Geneviève et les bibliothèques,* Maisonneuve & Larose, Paris, 2002. coll., Dubbini, Renzo（cura）, *Henri Labrouste 1801-1875,* Electa, Milano, 2002. coll., Bélier. Corinne, Barry Bergdoll, Marc le Cœur, *Labrouste（1801-1875）, architecte : La structure mise en lumière,* Cité de l'architecture et du Patrimmoine, The Museum of Modern Art, Bibliothèque nationale de France, Nicolas Chaudun, Paris, 2013. ピエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブルースト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴虔編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。

19、20 世紀フランスの建築、ルネサンス建築関連：ル・コルビュジェ、『東方への旅』、SD 選書、148、鹿島出版会、1979。三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。ピーター・マレー、『ルネサンス建築』、桐敷真次郎翻訳、図説世界建築史 10、本の友社、1998。ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・

19 世紀建築 2』、土居義岳翻訳、図説世界建築史 14、本の友社、2002。ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク、『フランス中世建築事典』、第 1 巻、黒岩俊介編集翻訳、Kindle 版、アマゾン、2018、Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle,* tome 1, B. Banc, Paris, 1854–1868.
修道院関連：*La Grande Chartreuse,* Sainte Madeleine, le Barroux, 1881, 19e edition, 2020. Spinazzola, Vittorio., *Certose di San Martino,* Vito Morano, Napoli, 1901, Wentworth, 2019. Fatini., Barbara, *The Chartreuse of Florence,* Cistercien Monks of the Chartreuse, Firenze, 1998. Retouch, Tommaso Breccia., *La ricostruzione dell'abbazia di Montecassino,* Gangemi, Roma, 2014. Napoli, J. Nicholas., *The Ethics of Ornament in Early Modern Naples: Fashioning the Certosa di San Martino,* Routledge, London, 2019. Andreini, Alessandro., Susanna Barsella, Susanna Barsella, Marco Cursi, *Niccolò Acciaiuoli., Boccaccio e la Certosa del Galluzzo,* Viella, Roma, 2020. Groning, Philip., *Die grosse Stille,* 2005, フィリップ・グレーニング、『大いなる沈黙へ：グランド・シャルトルーズ修道院』、フランス、スイス、ドイツ合作、2005。ヴォルフガング・ブラウンフェルス、『図説西欧の修道院建築』、渡辺鴻、八坂書房、2009。

図版出典

図 1 , 2 , 6 , 21, 22：BNP. 図 8 ：ENSBA. 図 9 ：Viollet-le-Duc（1854–1868）. 図 17, 18：FLC. 図 4 ：*le Passeggiate fiorentine, si diceva a Firenze...,* Biblioteca del Palagio di Parte Guelfa, p.2. 図 3 , 5 , 12 ～ 16, 19, 20：2019 年 8 月筆者撮影。

註

1 アンリ・ラブルーストに関する主要文献は参考文献に記載した。ラブルーストに関する筆者の論文：「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18 世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要、第 18 号、pp. 59–74、2012。「アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流」、博士論文東京大学大学院工学研究科博士課程、2015。「アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代：コンクール・デミュラシヨンにおける 18 世紀の啓蒙性と近代建築の予兆」、長岡造形大学研究紀要、第 14 号、pp.6–16、2017。「フランス国立図書館の端緒：シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と 19 世紀の建築」、長岡造形大学研究紀要、第 15 号、pp.13–21、2018。「パリ国立図書館の装飾芸術の主題に関する考察：大閲覧室のメダイヨンに見られる人文学の叡智」、長岡造形大学研究紀要、第 16 号、pp.14–21、2019。「中世シテ宮殿のグランド・サルにおける独立柱の空間：その空間の消失と 19 世紀の再発見」、長岡造形大学研究紀要、第 17 号、pp.13–20、2020。「アンリ・ラブルーストのイタリア時代のデッサン：アッシジのサン・フランチェスコ聖堂の描写に見られる細い柱と石造天井」、第 18 号、pp.12–19、2021。

2 ガルッツォ修道院は活動中であったことと修復工事により、長い間、見学が困難であった。工事も終了し、現在は一般に公開されている。

3 コリネ＝ゲラン：20 世紀前半に活躍した写真家。イタリアの建築のモノクロ写真を多く残し、彼の写真は芸術性と記録の観点から価値が認められている。

4 一般的な事項は以下の文献、辞典、辞書を参照した。『西洋建築史図集』、日本建築学会編、三訂第 2 版、彰国社 1983。『建築大辞典』、第 2 版、彰国社、1993。柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、『広辞苑』、第六版、新村出編、岩波書店、2008。『ブリニカタ国際大百科事典』、2010。*Encyclopédie Larousse en ligne. Encyclopædia Universalis.* グランド・シャルトルーズについては *La Grande Chartreuse,* 19e edition, Sainte Madeleine, le Barroux, 2020. を参照した。

5 Philip Gröning, *Die große Stille,* 2005. フィリップ・グレーニング、『大いなる沈黙へ：グランド・シャルトルーズ修道院』、フランス、スイス、ドイツ合作、2005。

6 アカイア公国の征服（1338–1441）の功績で知られる。グランド・セネシャルは領地の統治、裁判の統括、役人の統括を担った。

7 Andreini, Alessandro., Susanna Barsella, Susanna Barsella, Marco Cursi, *Niccolò Acciaiuoli., Boccaccio e la Certosa del Galluzzo,* Viella, Roma, 2020. フィレンツェのペスト大流行の際にガルッツォ修道院は芸術家達を受け入れ、制作が行われた。

8 Fatini., Barbara, *The Chartreuse of Florence,* Cistercien Monks of the Chartreuse, Firenze, 1998, pp.19–29, pp.33–34, p.40.

9 Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle,* tome 1, B. Banc, Paris, 1854–1868, ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク、『フランス中世建築事典』、第 1 巻、黒岩俊介編集翻訳、Kindle 版、アマゾン、2018。

10 筆者算出。

11 ガルッツォ修道院とル・コルビュジェの一連の集合住宅との関係性については下記の論文で詳細な研究がなされている。Leatherbarrow, David., "Le Corbusier: a modern monk", Armando Rabaça, *Le Corbusier, History and Tradition,* Columbia University Press, New York, 2021.

12 ラ・トゥーレットの修道院が静寂を旨としていることは学生時代に恩師藤木忠善先生から解説をいただいた。1965 年頃に御自身が撮影した一連の写真を見せていただき、静寂を守り、僧侶がすれ違わないように計画されていること、廊下の壁に「静寂」の案内が貼られていたことなどの解説をいただいた。これが本稿の静寂への着目の契機となっている。

13 片側端部を壁面に固定した一本足のテーブルの意匠引用について、松政貞治氏がサヴォア邸 2 階中庭やレマン湖の家（小さな家）と具体的に指摘している。松政貞治、「ル・コルビュジェの旅日記のスケッチを巡る影響作用史的相互参照構造の研究」、研究成果報告書、平成 25 年。

14 ル・コルビュジェ、『東方への旅』、SD 選書、148、鹿島出版会、1979。

15 Napoli, J. Nicholas., *The Ethics of Ornament in Early Modern Naples: Fashioning the Certosa di San Martino,* Routledge, London, 2019. Spinazzola, Vittorio., *L'Arte ed il Seicento in Napoli. Alla Certose di San Martino,* Vito Morano, Napoli, 1901, Wentworth, 2019.

16 Fratadocchi, Tommaso Breccia., *La ricostruzione dell'abbazia di Montecassino,* Gangemi, Roma, 2014.